
雪・月・火

斉藤雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪・月・火

【Nコード】

N0361A

【作者名】

斉藤雅

【あらすじ】

将兵候補生のみで編成された部隊の隊員達の成長や戦争の終結まで。

序章（前書き）

この小説は一応海軍ものですが、実際の海軍にはありえない設定が山ほどあります。このようなことが許せない方達はお読みにならないほうがいいです。

序章

1950年

冷戦のさなか、アメリカとソ連は太平洋で戦闘を開始した。

その戦闘は次第に拡大し、両国は予てから開発していた「新しい生物兵器」を投入する。

拡大した戦闘は世界に飛び火し各国は競ってその「新しい生物兵器」の開発に乗り出し、

日本もまたアメリカの軍政の下で密かに開発を始めた。

1960年

日本は憲法を改正。新しく発表された日本国憲法は大日本帝国憲法に逆戻りする形となる。

そして翌年に「新しい生物兵器」の国産第一号が完成。この兵器は後に「スサノオ」と呼ばれ、

戦後の日本技術の高さの象徴となった。

翌年に日本は陸・海・空の三軍を組織、徴兵令を敷く。

1989年

日本の石油タンカーが「暴走」したソ連製生物兵器「ディアナ」に襲われる。

これを境に世界に生物兵器が「暴走」を始め、各国はその兵器の「駆除」に追われ、人類同士の戦争を休まざるを得なくなる。

2000年

ソ連が生物兵器に対して初めて核兵器を使用。しかし効果はなく、

一面の放射能に汚染された焦土と健在している兵器が突きつけられた。

この頃から人類側の勢力は弱体化を始め、同年、南アメリカ力要塞が陥落。

2020年

戦況を憂いた日本国軍省は士官学校及び兵学校在学中の生徒も実戦配備することを政府に決定させる。

同年七月二十九日、天城隊発足。将兵の候補生のみで編成された初の部隊である。

彼らは善戦し、前代未聞の昇進を果たす。

天城隊は前線の将校達の語り草となり以下のような会話が必ず見受けられた。

「天城隊がまたやってくれたな。」

「まったくあいつらも大した者だ。あの隊が存在する限り、どんなに負けても最後には勝てそうな気がする。」

序章（後書き）

はじめまして、斎藤雅です。

初めてだらけの小説ですが、これからよろしく願います。
次回から本格的にストーリーに入っていきます。

第一章

「いい天気だなあ・・・。」

神威悠里は砲台の下に寝転がりながら呟いた。

空は雲ひとつなく典型的な「青空」だった。まるでそれは、人類が「暴走した兵器」と激戦を繰り広げている事などが嘘のように見えるぐらい平和な空だった。

休息を切り上げ、そろそろ戻ろうかな、と悠里が体を上げたその時、

ゴンッ！！

「痛ったあゝ！」

砲台に頭をぶつけたのだ。

頭を抑えながら悠里は再び寝転がる。白目を剥いてしまいそうな痛さだ。

「いゝたゝいゝ。」

うぐぐぐ・・・、と悠里が痛みと必死に闘っていると何処からか声が聞こえてきた。

「なあーにやってんだよ。バカ。」

その言葉に悠里は痛みも忘れ、額に血管を浮き出しながら言い返した。

「うるさい！龍仁のくせに！あんただってこの前ぶつけたでしょ！」

龍仁と呼ばれた少年は「ああ」と言うと悠里の側にしゃがむ。

「俺がバカにしているのはぶつけた事じゃない。その後。お前みたいに呻きながら痛がってないし、さっさと医務室に言っテシッパはっテもらっただぞ。」

龍仁の言い分に言い返せなくなったのか悠里はゆっくりと身を起こし、ぶつけた額を擦りながら医務室へと歩き出した。

龍仁はそれを見送ると自分も砲台の下に寝転んだ。軍艦の揺れがな
んとも言えず気持ちよく彼は知らぬ間に重い瞼を閉じ、眠り始めた。

その頃悠里は医務室で先程の額を冷やしてもらっていた。悠里はそ
の間にさっきの龍仁との

やり取りを軍医の女性に話した。軍医は少し笑いながら、

「全くあなた達は平和よねえ。仮にも戦争中だったのにそんな言い
合いができるなんて。」

まあそれがあなた達のいい所なのかもね、と言いながら悠里の額に
丁寧にシップを貼る。

「でもあんな言い方しなくてもいいと思わない！？なにバカはな
いでしょ。咲耶はどうよ？あんな事言われたらさ。」

咲耶という軍医は、あははと言うと

「なんとも言えないなあ。あいつなりに親しみこめてんじやない？
でもバカはちよっとひどいかな。」

あ、そういえばさっき寛治さんがあなた達のこと呼んでたよ。あ
たしも後で行って見るけど。」

と少し微笑みながら言った。

「うん。そうする。じゃあ、ありがとね。咲耶。」

悠里はそう言うのと医務室を後にした。

悠里が艦長室に着くともうそこには小隊の隊員がそろっていた。そ
こには先程争いのあった龍仁の姿もあった。寝ていたのか少し眠そ
うだった。

「お、来たか。じゃあ本題に入るか。」

藍色がかった髪 of 青年は口を開いた。

「任務だ。」

この一言で小隊一同は表情を少年少女の表情から一人の軍人として

の表情に変えた。

第二章

「まあ内容はいつもと同じような感じだな。」

そう言いながら寛治は金属製の机にたくさんの赤線が引かれて使い込んだと見受けられる地図を広げた。そして細めの指である島の近海を指した。

「ここが今の俺達の現在地、宮古島だ。ここから南西よりに進んで与那国島へ進む。」

伊集院中将の話によると、先日キメラが出現し、近くを航海中の艦隊が迎撃したが

何機か逃げられたらようだ。その生き残りを俺達が始末しろ、と中央参謀本部からの命令だそうだ。」

「ねえ、そのキメラがずっと一所に留まってるっていう証拠はあるの？」

栗色の髪に色白の肌が印象的な少女が寛治に疑問符を投げかける。

普通は上官に対しては敬語を使うのが当たり前のはずだが、この隊では上司にたいしてもため口を利くのが普通の様だ。

「ああ。俺達がこれから戦うのは『エリダヌス』という元ギリシャ製のキメラから派生した奴だな。そいつは命令が解除されるまでの間はずっと同じ所に留まる『習性』がある。別の場所に移動するとは考えにくい。・・・まあ、今では命令も何もあつたもんじゃないからな。」

少女は納得したのか、だまっとうなずいた。

寛治は一息つくと、

「とりあえず伝えておくことはこれ位だ。各自準備は万全にな。」
「と言い、一時の集会の解散を宣言した。」

彰は愛機・飛龍の最終点検をしていた。飛行水雷機と称するには少々美しすぎるフォルムを持った機体だった。隣には兄弟機の翔龍。これには彰と同期の少年・龍仁が搭乗する。

「なあ、氷室。」

氷室、と苗字で呼びかけられた彰は頼杖をついたまま龍仁の方を向く。

「なんだよ。」

「この戦争さあ、俺ら勝てると思う？」

龍仁の問いかけに彰は少し考えながら答えた。

「どうだろうな。」

今はそれしか答えられない。人類側の戦況はお世辞でも勝利を保証できるものは何一つないからだ。

「ふーん。」

この言葉を境に二人の水雷屋は各々の愛機の実最終点検を続けた。

「うー。緊張するよ。」

もう慣れてるはずなのに、とショートヘアの少女がこちる。

「大丈夫よ。敵はそんな多そうじゃないし。巴ってそんな心配性だったっけ？」

先程の茶髪の少女が言った。

「心配性ってわけじゃないけど……。沙織は緊張しないの？」

「してるとしないの中間かな？だって無駄に緊張したってキメラが消えるわけじゃないし。」

それに負けるって思ってたら本当に負けちゃうし。」

沙織と呼ばれた少女は口元をほころばせる。

「まあさ、戦死しない程度にがんばればいいんじゃない？戦争生き残った方が勝ち！」

悠里が明るく投げかけた。

「それにうちらがまだ士官学校にいて実戦配備される時に約束したじゃん。」

絶対に生き残ろうって。」

『絶対に生き残る』と言う約束

それは死と隣り合

わせの戦場では何の意味も無いものだ。

しかしその『何の意味も無いもの』は彼女達にとっては『何よりも大切なもの』だった。そしてその約束の為に彼女達は戦う。

『天城隊、与那国島近海二到着ス。増援準備急行セヨ。』

この電文の行き先は日本海軍沖縄基地2017航空隊、別名『隼小隊』だった。これに気づいた隊員の一人が上官を呼んだ。

「隊長、天城隊の増援電文です。応答してください。」

「……………」

「隊長？」

「……………」

隊員がもう一度呼びかけようとした時、彼の鼓膜を爆発音と数々の断末魔が振る寄せた。

「おい！宮川！俺だ！安藤だ！」

宮川と呼ばれた男は不安と困惑の交じり合った声で返事を返す。

「隊長！今の爆発音は！？」

「キメラに襲撃を喰らった。今の通信だが、とても増援なんてできる状況じゃない。悪いがお前が行ってくれ！」

「そんな！自分はまだ……………」

そんな大役は務まりません、と言うと安藤はさっきとは全く違う、励ますように言った。

「大丈夫だ。お前ならきつと、いや、絶対にできる。それにいざとなったら神威を頼れ。」

あいつはきつと何かを……。クソッ、目の前が霞んできやがった。」

「隊長!!」

「早く行け! 確かお前のところには何人が残っているだろう! 早く!」

「……。了解しました。ご武運を。」

宮川が重い声で言いながら通信を切ろうとした時、

「宮川。」

「?」

「お前もだ。幸運を祈る!」

この後に聞こえたのは爆発音と砂嵐の音だけだった。

宮川は通信を切った。そして泣いた。声を殺して、泣いた。

隊長の安藤と初めて会ったのは士官学校に入学して一年たった頃だった。

当時はあまり(というか全然)成績は良くなく、いつも残って自分だけで訓練をしていた。そこにいきなり安藤がやって来た。当時の彼は最高学年の四年生で奇抜な奴だと言う事で有名だった。

「お前つて、いつも独りで練習してるんだな。」

この一言が始まりだった。宮川は安藤に懐き、安藤の方も宮川には目を掛けた。

「隊長……。いや安藤先輩……。この基地に還ってくる事ができたら、一緒に飲みに行きましょう。」

届くはずのない通信機に向かってそう言つと宮川は同僚のいる場所に走りながら言った。

「今天城隊からの通信があつた! 増援に行くぞ!」

その場にいる同僚全員が振り向いた。一人が言った。

「増援!? 久しぶりのキメラ狩りだな!」

悠里は自分の愛機に乗り込み、自分の立場を再確認し自分を鼓舞する言葉を口にする。

「神威悠里、雪風出撃します!!」
つぎの瞬間、五機の兵器が打ち出され二機は上空へ残りの三機は海底へと進んだ。

戦闘画面には赤い点が五つ。キメラだ。近い。

「・・・予想より近いわね。」

言葉の主は沙織だった。彼女の機体は月読^{ツクヨミ}。

「近かるうが遠かるうが関係ないよ。今は戦う。それだけでしょ？」
巴が言う。先程のやり取りの時とは裏腹な冷静さを持ち合わせている様だ。彼女が駆る機体は不知火^{シラヌイ}。

「来た!」

悠里たちは各々別の方向に散った。敵のキメラ、エリダヌスがそれに続いた。

悠里は雪風の自慢の俊敏性を生かしながらずかさを相手に斬りかかる。海中で銀色の刃が水と相手を斬る。エリダヌスは身をくねらせ斬撃をかわそうとしたがそれは無駄な行為に終わった。雪風はもう一本の太刀を持っていたのだ。『彼女』はそれを引き抜くと鋼鉄の海蛇を二つに切り裂く。

沙織は間合いを取ると正確に狙いをつけた月読のライフルを撃つ。命中。相手がひるんだ隙に後ろに回り、そして至近距離でもう一度ライフルでエリダヌスのミサイル発射口を撃った。中の弾が誘爆しエリダヌスは姿を消す。月読はカトラスを取り出し次なる獲物を追った。

「はいはいこっちにいらつしやうい。」

そう呟きながら巴は機雷を爆破するチャンス老虎視眈々と狙う。そこへ雪風が援護するように二機のエリダヌスをおびき寄せた。

「巴！今だよ！」

「りょーかい！」

刹那、機雷が爆発し海を振るわせた。すぐさま不知火と雪風はその場を離れ月読のところへ向かった。

「上のほうは大丈夫かな？」

巴が通信を繋ぐ。

「はいはい徳永龍仁の通信サ〜ビスです〜。」

「あー龍仁？巴だよ。そっちどうなってる？」

「今のトコ敵は視認できないな。だけど戦闘画面にはバリントン海峡から何機か写ってる。」

結構数が多いからそっちが終わったら上に上がってくれ。」

「はいいよ。」

二機が月読のところへ着いた時、沙織はもうエリダヌスを倒していた。

巴が彼女に先程のことを伝えた瞬間、小隊の戦闘画面に耳を劈くような音が響いた。

「敵の増援だ！」

寛治の声が通信を通じて小隊全員も鼓膜を振るわせた。雪・月・火は空へ昇った。

「あれは！？」

「元日本製のキメラらしい。コードネームは『葵』。」

『葵』が編隊を組んで向かってきた。天城隊は迫りくる敵に対して攻撃姿勢を構える。その時彼らの頭上を戦闘機の影が通り過ぎた。

「神威隊長！」

若い声が寛治に呼びかけた。宮川だった。

「・・・宮川？お前達もしかして増援か！？那覇基地は襲撃を受けた

と聞いたぞ?!」

「はい。私達のところは無事だったので・・・。」

「そうか。礼を言う。」

2017 航空小隊は戦闘機『白鷹』を駆り、葵に勝負を挑んだ。蒼龍・翔龍もそれに続く。

大空は混戦の戦場と化した。天城隊のネームシップである戦艦・天城は艦砲射撃で味方を援護する。雪・月・火は撃ち洩らした敵を仕留めつゝ、天空を舞う。

2017 小隊は天城に收容され、天城隊の隊員と共に休息をとった。
「そうか。安藤は。。。」

生きてはいないかも知れないのか、と寛治は言った。その黒曜石のような瞳は重く沈み、光は消えていた。

「でも、俺は信じてます。安藤先輩は。。。」

宮川は自分の隊長を士官学校時代の呼び名で呼んでしまったことに気づき口を押さえた。寛治はその行動を見ると声を殺して笑った。

「し、失礼しました・・・。」

宮川が恥ずかしそうに頭を抱えた。寛治はいやいや、と手を振ると言った。

「安藤らしいな。」

「??」

親友の部下が困惑していると、

「まさかあいつ、自分の部下になってもそのままの呼び方で放って置いたろ?」

と寛治が少し笑いながら尋ねた。

「はい。でも正式な軍人になったので直そうとしたんですが・・・。」

「結局治りませんでした、と宮川が答えた。」

寛治はふうんと言ふなり、

「基地まで送ってやる。それまで休んどけ。」

と言い艦長室を立ち去った。

宮川は意味深な彼の言動に疑問を抱いた。そして急いで敬礼をしな
がら言った。

「ありがとうございます！」

しかしその言葉は遅かった。。。

第二章（後書き）

せ、戦闘シーンがうまく書けてない・・・。
もっと修行します。

文才がほしいー！

第三章

「ったく。血の匂いってのは慣れないもんだな。・・・ま、慣れちゃ困るけどな。」

「だけど被害は思ったより少なえや。宮川、北部の海軍病院への道は知ってるか？」

「宮川は弾かれたように反応すると、軍服の袖で血の匂いを防ぐようにしながら答えた。」

「はい。ここからは遠くはありません。」

「そうか。じゃあ、俺と宮川は北部の軍病院へ。残りのお前らは・・・ここに残って見張りだな。もしもキメラの襲撃に遭ったらそれぞれの最善をつくせ。」

「最善をつくせて・・・。」

「もつと具体的な命令は出でこないのかよ、と悠里が半ば溜息をつく。」

「悠里。」

寛治の妙に意味深な声が彼女の鼓膜をふるわせた。

「ななな何でしょう、兄貴？」

「最善をつくさなかったらどうなるか解ってるな？」

寛治は悠里の耳元で囁く。

「無理矢理俺の晩酌につき合わせるぞ。」

この言葉を聞いた瞬間悠里は身も心も凍りついた。そして黙って何回も首が千切れそうに頷いた。

「行くぞ、宮川。」

悠里の実兄　寛治は一言そう言つと宮川と共に北部へ向かって歩き出した。

「ねーねー、悠里さっき何て言われたの？」

巴が興味津々といった感じに魂が半分抜けて見える悠里に尋ねた。
問いかけられた悠里は目が虚ろになりながら答えた。

「ウチの兄貴は、超が六兆五千万個つくぐらい大酒飲みでさ。で、ウチが小さい頃にちよつとした悪さをしましてですね、その時は運悪く兄貴がべろんべろんに酔っ払っててその上機嫌悪くてさあ。『おめーも飲めー！』なんて言われて無理矢理飲まされたんだよ。まあその時は2〜3時間ぐらいだったけど、兄貴はあたしが二日酔いになったの覚えてるから、それを・ね、ほら。」
わかるっしょ？、と悠里が言つのを見ると巴は苦笑いしながら頷いた。

「それって何歳の時？」

「・・・じゅ、12歳の頃かな。」

神威悠里、初めての飲酒は12歳です。

「随分混んでますね。」

宮川が辺りを見回しながら言った。満員の病院内を運ばれる負傷者の中には正視できない程の者もいた。

包帯が鮮やか過ぎる紅に染まっている者。四肢が完全でない者。キメラに体の一部を食い千切られた者。それはキメラの襲撃が大きかったことをそれと無く指し示している光景だった。

その時宮川の心の中に疑いの感情が芽を出した。

自分の上官は生きていると信じていいのだろうか？

自分の上官、と言う前にそもそも人類はこの戦争に勝てるのだろうか？

「宮川。」

寛治の声で宮川は、はっと我に帰った。

「安藤の病室がみつかった。三階にいくぞ。」

歩き出す寛治に宮川は慌てて付いていく。

（よかった……。先輩、じゃなくて隊長は生きてるかも……。！）

悠里は戦艦・天城の甲板にたたずんでいた。涼しい潮風が彼女の黒髪と頬を羽毛で撫でるかのように吹いていく。

世界で一番綺麗な青色にひとたびキメラが降り立つと、そこは世界で一番残酷な紅と一番綺麗な青が入り混じって一番悲しい紫になる。そしてそこには不完全な人の体やキメラの一部が浮かぶ。

悲しかった。

残酷だった。

「自分」という存在の小ささを否が応でも感じさせられた。

その時、

悠里は後頭部を鈍器で殴られたような感覚を覚えた。心臓の音が嫌に大きく聞こえた。

目の前は白黒だった。しかし一色だけやけに鮮やかな色があった。それはなにかから噴出していたり、川のように流れてもいた。

（血だ……。！じゃあ、あれは人！？）

「人」はある異形の「生物」と戦っていた。しかし奮戦するも体をどんどん喰いちぎられていく。その度に「血」が流れ出てくる。

悠里は意識を周囲に拡散させた。周りでも同じような事が起こっている。

両手足の無い者。

体を丸ごと食われる者。

「生物」の下敷きにされる者。

これらの光景に悠里は見覚えがあった。自分は見た事がないのに。

（何なのこれ！？）

頭の中を様々な考えが飛び交った。

幻覚か。予知夢か。それとも「現実」か。

（落ち着いて。落ち着いて！！）

悠里は自分にそう呼び掛けたが精神の安定は保てなかった。考えているうちに目の前の光景が次第に薄れていくのを感じる。段々と白黒と血の色で色取られた景色が雪色の靄の中に沈んでいき、悠里の意識はまた別の「現実」へと飛んだ。

意識がもどった悠里は急いで周囲を見回した。海も天城も自分自身も何も変わっていない。風も爽やかな潮風が吹いているだけだった。先程の「夢」は何だったのだろうか？それ以前にあれば「夢」なのか？もつと違う「何か」ではないのか？

「今考えても仕方ないよね……？」

悠里は自分に言い聞かせるように独り呟いた。そう、あれは夢。ただの夢。だけど、とても悲しい。そして彼女は無意識に海に向かって言葉を紡いだ。

「大丈夫だよ……。敵は……討つから、絶対に……。キメラなんか皆殺しにしてやる……！」

「月読はどう思う？」

沙織は自らの愛機にむかって問うた。戦争のこと。来る望みの無い平和な戦後のこと。

月読は「無言」のままだった。しかし沙織にとってそれは充分過ぎる答えだった。無生物である兵器に答えはないからだ。『生ける兵器』であるキメラは別だが。

沙織は色白の手で少し月読を撫でると自分と愛機に言葉を投げかけた。

「頑張ろう、ね？」

きつと勝てるよね？、と。その声はわずかに震えていた。そして沙

織の頬を水晶のように澄んだ涙が零れ落ちる。

「母さん……。あたしはちゃんと生きてるよ。戦争が終わったらまた会えるよね？」

月読は「無言」だった。しかしかな温もりが沙織を包み込んだ。沙織は垂れかかった栗色の髪を後ろに回すと、母の設計した機体

月読　にむかってにつこりと笑いかけた。

「ありがとう。」

月読が少し笑ったような気がした。

「おう！宮川と神威じゃねえか！」

安藤は二人が入ってくるなり、溢れそうなまでに明るい声色で二人を迎えた。安藤のケガはそんなでもなく、所々に大きめの絆創膏がはってあるだけだった。

自分の尊敬する上司であり先輩の姿を認めるなり宮川は喜色満面といった感じで

「たああいちよおおおおー！」

と言いながら安藤に抱きついた。それはさながら迷子だった子供のようだった。一方の安藤は宮川の短い髪の毛を手でくしゃくしゃしながら寛治に目を向ける。

「神威。」

「何だ？」

「うちのが迷惑かけたな。途中で泣いてたりしてなかったか？（笑）」

「泣いちゃあいなかったが豪く凹んでたぞ。そんな中にお前が生きてたからこの調子だ。」

随分と懷かれてるんだな、お前は。」

「まあ士官学校時代以来の付き合いだしな。それにしてもあんなに

操縦の下手くそだった奴が

ここまで戦って来たのが不思議な感じがするぜ。お前、本っ当に下手くそだったよな。」

ま、俺がしごいてやったんだけど、と安藤は屈託なく笑う。当の宮川は恥ずかしそうに苦笑いをしている。

「はい。安藤先輩のおかげでかなり上達しました。でもあの訓練方はちょっと無茶苦茶ですよ。

最初のうちは過労で一週間学校を休んだぐらいです。（笑）」

「そりゃそうだ。あんな訓練で体調を崩さないほうがおかしいぞ。」

さつきから二人の会話を聞いていた寛治は和んだ笑顔をみせながら言った。

「今度何時飲みいく？」

その言葉に安藤は目を輝かせた。

「今度の休暇にしないか？そうすればお前の隊の奴らも来れるだろう？」

「そうだな。久しぶりに一杯やれるな。」

「久しぶりってヒロは毎日天城で飲んでるだろー！」

「いやいや。飲酒躁艦は海軍軍人には厳禁だぞ。」

そういうお前も実は毎日飲んでるだろ、飲酒飛行は危険だぞ、と寛治が言った。

そこは青い海だった。群青色の深い海。海底には沈没した軍艦や潜水艦がありそこには様々な魚が住み家としていた。

その時、

ひとつの魚群が消えた。消えた後には赤い血が海水に溶けていく。魚群喪失の主は猫の目のような目を幾つも動かしながらある場所へ引き寄せられるように泳いでいく。

上空では高い空をなにか竜のようなものが海底の何かと同じ方向に飛んでいく。他のたくさんの「あれ」を引き連れて。その群れはもう少し高度が低ければ空を黒く染めていたであろう程の規模だった。「あれ」が日本のある場所に集結しつつあった。

第三章（後書き）

遅速更新で第三章です。

本当になかなかお湯がわきませんこの小説wでももうそろそろ沸き始めるかと思っています。

悠里の隠された部分や沙織の過去、寛治と安藤の学生時代のことなど書きたいことがやたらたくさんあってちょっと困ってたり。

でも読んでくださる方がいると思うとがんばろうって言う気持ちかわいて来ます。これから頑張りますのでよろしくお願いします。
では長文失礼しました。

第四章

海軍大臣室には二人の軍人がいた。一人は机をはさんで海軍相らしき人物と向かい合って立っている。立っているのはセミロングの黒髪をうしろで束ねている22歳ほどの男で白襟の軍服を着ている。

「先程も申し上げましたが決戦の準備はお早めに願います。」

黒髪の青年は優雅に一礼すると悩みに顔をゆがめている海軍大臣に背を向けて部屋を出ようと歩き出した。

「伊集院中将。」

海軍大臣は低い声でドアノブに手を掛けた伊集院を呼び止める。

「何でしょう？」

伊集院は手を掛けたまま海相へ向き直った。

「勝算はあるのかね？」

問いかけられた伊集院はふつと口元もほころばせながら答える。何をいまさらとも言うように。

「わたしは勝算のない戦いはしない主義なんですね。」

その一言を残して彼は海相室を後にした。

海軍省を出た伊集院は何かを探しているか辺りを少し見回した。そして探していたそれが見つからないと納得すると灰色の空にむかって呼び掛けた。

「玉葉。」

その言葉が発せられたと同時に空から黒い鷹が舞い降りて来た。玉葉と呼ばれた鷹は伊集院の腕に止まると自らの主にのみ解る言葉をつむぐ。

「直泰様、奴らは東京へ向かっています。戦力は確実に増大し、このままでは日本は敗北するでしょう。」

式神の言葉を聞くと直泰は空を仰ぎ見た。藍色の深い色合いを持つ瞳はどこかとても遠くをみているかのようでどこか物悲しかった。

「このままでは・・・か。裏をかえせばまだ準備の余地はあるとい

うことだが今ではそうも言ってもらえない。しかし敗北は許されない。何とかしなければ日本の神門を護る二つの氏族の存在意義がなくなる。奴らの誕生以来彼らと戦えるのは・・・あの二氏族だけだ。行こう。」

神門を守護する二氏族のうちの一族伊集院家の若き総領はもう一族のいる場所へ向かった。

「なんだか頭がガンガンする・・・」

悠里は目の前の群青色の大海原に視線を移した。

先程の「夢」は何だったのだろうか。妙にリアリティのある出来事で暫くの間まいち現実とその区別がつかなかったほどに生々しく、そして、記憶のうちに引つかかる。

目の前でキメラになぶり殺しにされた軍人にも見覚えがあった。名前は思い出せないが確か同期で銃剣道では無類の強さも持っていたような気がする。

そして「あの時」

そいつは満身創痍で動けない「俺」の目の前で

キメラに殺された

両手足を喰いちぎられ

それでもなお戦おうとしたあいつの体を

いくつかの肉片に変え

そして動けない体に鞭打って一撃だけの反撃をした「俺」を

わざとぎりぎりの傷にして

周りの同期のやつらをなぶり殺しにしていた

「俺」は落ちていた拳銃の引き金に姉貴から「お守り」として貰った首飾りを引っ掛けて

キメラめがけて撃った

最後の反撃をした「俺」はその場でゆっくりと瞼を閉じた

出血は多かったが段々と痛みも収まって何だか安心したような感じだった

その時からの記憶は

ーない

「悠里！」

悠里が「記憶」の海でゆっくりと泳いでいると何者かの声でいきなり陸へと引き上げられた。

「キメラの襲撃よ！はやく出撃しないと！」

肩で息をしながら沙織はぼけつとした悠里の腕を掴み強引に引いてった。

『敵は雑魚が多いが何体かやたらでかいのがいる。今回は水雷は使ふ必要はなさそうだから俺はおとなしくすっこんでるとするよ。』
龍仁と彰は天城の砲術士官の席に座りながら言った。

『えー！？でも仕事はちゃんとしてよー！？』

『じょーだん、じょーだん　むしろ大暴れするつもり　もしかしたらお前ら出る意味ないかもなー。』

瀧澤と龍仁の会話で悠里はやっと現状を把握した。自分が今戦わなければならぬことを。

「・・・とりあえず出撃しよ。」

悠里が通信越しに呼び掛けた。

「神威悠里、雪風・・・出撃します。」

次の瞬間天城から雪風が天空に舞い上がり不知火、月読もそれに続いた。悠里の精神状態に一抹の不安を抱きながら。

第五章

戦闘画面には敵の分布を示す点が無数に表示されていた。点の大きさを相手のだいたいとの戦闘バロメーターがわかるようになっていた。

未確認のキメラなら話はまた別だが。

『何なのよこの敵の多さは……』

沙織が眉間に皺を寄せる。戦闘画面には画面が赤い点で埋め尽くされているとつても過言ではないほどのキメラの分布表示が成されている。

悠里は無意識に呟いた。

「あのなかに「あいつ」を殺した奴は……いるのか？」

その声色は普段の彼女のそれではなく、それは体の底から湧き出る怒りを抑えながらも殺意に満ちていた。寶石をそのままはめ込んだように美しい若草色の瞳は紅玉髓のごとき鮮やかな緋色に染まり普段の悠里の人間性を完全に消し去っていた。

連結されているソケットから思念を雪風に送る。それを受けた純白の雪風は静かに、そして大きな戦に向かう戦乙女のように太刀を構える。微妙な反りのある太刀は太陽の光を反射して銀色に輝いていた。その光景は優美で女性的なラインを湛えた雪風と見事に調和し、西洋画に描かれた戦女神のようだった。

悠里の鼓膜を月読と不知火の飛行音が振るわせた。目の前の戦闘画面にはそれが白い点で示される。そして遠めの向こうに大きな点が映されている。

（まずはあのキメラを殺るか……）

悠里は雪風に指示を送った。雪風は主の「言葉」に応え、標的のキメラに向かって流星の如く飛行を開始した。

「なんだ？また戦闘か？」

何だか慌しいな、と安藤が言う。

「微かに機械音が聞こえる。・・・方角は南部か？だとしたら俺はここでちんたらしてらんねえな。」

先程までのやわらかい表情とは打って変わって寛治は鋭い鷹のような眼差しで南を見つめる。

（悠里たちは戦闘中ってことか。俺があそこに着くまでもつてると良いがな。）

一方の安藤は一人の看護師を呼びとめ状況を尋ねていた。南部では何が起こっているのか、と。

「神威。」

安藤が低い声で呼び掛ける。それは何かを促すようだった。

「おめーの妹たちが戦闘中だってよ。早く行ってやんな。俺はこの通りだが宮川は行けるはずだ。」

行ってくれるか、と尋ねるような視線を宮川に向けた。それを受け止めた宮川は一人の航空機パイロットとしての顔で黙って首を縦に動かした。

「・・・行くか。」

寛治は椅子から立ち上がると安藤に仲間内だけ通じる敬礼をしながら病室を出た。それに対し宮川はいかにも「行って参ります。」といった表情で敬礼をし、寛治のあとに続く。

二人が出たのを見届けた安藤はゆっくりと南の青い空を見つめた。

戦場に純白の戦乙女が舞う。彼女の揮う太刀によって多くの小型キメラが切り裂かれ海に落ちる物もあればその場で雲散霧消するものもあった。その後ろを不知火が戦場を所狭しと飛び回り、得意とする射撃で相手を迎撃する。一方の月読は硬軟交えた戦術で次々とキメラを仕留めていく。相手のレーザーが被弾することはあっても彼

らは大して気にしていなかった。いや

気にしてなどいられない状況だった。敵が多すぎるのだ。いずれこのままでは激しい消耗戦となり彼らは負ける。弾薬や太刀の替えはあっても取り替える暇が存在しないのだ。

戦争での負けはすなわち「死」。最悪の事態を避けるためにも彼らは負けるわけにはいかなかった。

そして主のいない母艦・天城も寛治のいる時に比べて多少劣るものの、互角にキメラの大群との戦闘を展開している。彰たちもまた負けるわけにはいかなかった。

「寛治さんの来るまでの辛抱だな。」
彰が一人ごちた。

「あとどれくらいだ？」

戦闘機・白鷹の後部座席で寛治がパイロットの宮川に尋ねた。宮川は操縦にほとんどの神経を費やしながら答える。

「あと30kmほどです。大分戦闘は激しいようです。」

宮川と寛治の眼は前方には黒い点が大空で激戦を展開しているのを捉えた。

第六章

何時間ほど経つたらうか群青色の海に一筋の閃光が走った。光の主はゆつくりと空をこちらへ進んでくる。

幾つもの血のような紅蓮の目。西洋のドラゴンのような体を持ち漆黒の鱗で全身を包んだ大型のカメラだった。

海を駆け抜けた閃光は雪風の腕部に傷を残し、二本の太刀のうちの一本を打ち砕く。しかし雪風はそれを物ともせず大型カメラのワイバーンに突撃を賭けた。

月読は搭載されたミサイルを発射した。黒瑠璃色の機体から撃ち出された無数のミサイルは周囲一帯の小型カメラを次々と撃墜していく。

一体の小型カメラ　元日本製だった「疾風」と名づけられた一体のそれ　が発射されたミサイルの炎をその身に纏いながら雪風に体当たりを仕掛けようした。

『そう簡単に攻撃できるとは思って欲しくないわね。あんたの相手はあたしじゃないわ。』

そう言いながら悠里は残っている一本の太刀でそれを難なく切り裂く。緋色に染まった瞳は冷酷な光を秘めていた。

そして先程のワイバーンを標的に被弾した左腕を向け搭載されているマシンガンを撃ち出し、それと共に雪風自身もワイバーンに太刀で攻撃を掛けた。ワイバーンの腹部を縦に斬る。

太刀を受けたワイバーンはひるみを羽ばたきで修正し至近距離で生体ナパームを雪風に当てる。爆発。その場にいた全員の時が一瞬止まった。

寛治は低空飛行をした白鷹から飛び降り天城の甲板に受身の体勢で

転がり込む。そしてすぐに立ち上がると中に入り残っている二人

彰と龍仁　　に自分が帰ってきたことを告げた。

「悪リイ！遅くなった！」

走って艦長席に座り天城のソケットに自分の腕を連結させる。

「お疲れさんだな二人とも！次は俺が引き受ける！」

その声を受けて龍仁たちはオペレーション活動に切り替えた。

「寛さん。」

「？」

「今さっき雪風が被弾しました。」

「・・・そうか。さっきの爆発はそれだったのか。」

寛治は表に出さずとも心の内で妹の無事を祈った。

『こちら白鷹。援護射撃にはいります。』

宮川が通信を入れる。それを受けて彰が疑問を投げかけた。

「了解！雪風はどうなっている？」

『ナパームが当たったようですが・・・、なっ！？無傷！！？』

「無傷」。天城にいる三人の若い軍人はその言葉に驚愕の意を隠せなかった。

そもそもあの至近距離で攻撃を受けて無傷で済むはずがないのだ。雪風の装甲は決して厚くはなかった。誰もが宮川の言葉を疑った。

爆発の白煙の中から二体の兵器の姿がうつすらと見えた。純白の兵器は相手のドラゴンの体を銀の刃で貫いていた。確かに雪風は無傷だった。ワイバーンのレーザーを受けた傷と多数の疾風から受けた小さな傷を抜くと雪風には何の傷をついていなかった。

雪風が太刀を抜くとワイバーンは身を小刻みに震わせながら爆発し永遠に姿を消した。

この爆破でも雪風は何の損傷も無かった。謎の壁が雪風を護っていたのだ。

そしてワイバーンの消滅につられるようにして残った疾風らは雲散

霧消した。

海に静寂が戻った。

巴は天城に戻るや真つ先に悠里の許へ向かった。

「悠里！」

自分の名前を呼ばれた彼女は、はっと我に還った。目はもういつもの若草色に戻っていた。

「さっきの爆発でよく無傷だったね。ケガはないの？」

悠里は半ばけーっとしながら応答した。

「んーケガはこの通り全然ないんだけど……。」

「だけど？」

「戦闘中の記憶が全くないの。何ていうかこうね、頭の中が真っ白っていうか何も考えてなくてほぼ無意識で戦ってたような感じ。」

悠里の答えに巴は怪訝な顔をした。そして暫くの間考えこんだが「ま、無事でよかったね。」と笑いかけた。悠里自身は戦闘前のあの「夢」と先程の戦闘を交えて考え込んだ。

「ともかく俺らは無事だったわけだが……。」

彰はイスに寄りかかりながら呟いた。その声はまるで体力のない生徒が持久走を終えて戻ってきた時の声色だった。魂が半分抜けているとも言っていないだろう。

「砲術がこんなに大変だとは思わなかったぞ。」

龍仁もイスに腰掛けたまま前方に上半身を投げ出している。目は半分死んでいる。

「お前らは自室で寝てきたほうがいいんじゃないか？」

寛治はふたりの一日砲術士官に休息を促した。彰たちは幽霊行列の

ように猫背にしながらそれぞれの部屋に向かった。

独りメイnlームに残った寛治はソケットから腕を外して考え込んだ。

（何で悠里は無傷で済んだんだ？それにあの「壁」は一体……）

考え込んでいる寛治に一つの通信が入る。

『宮川です。一旦北部の病院に戻ります。』

「了解した。ご苦労だったな。」

『では失礼します。』

短い通信を切ると寛治の頭の中を一つの考えが横切った。

（もしかして悠里は……「あの能力」を持っているのか!？）

第七章

戦艦・天城は北部の軍港に停泊していた。軍港には多数の戦艦や巡洋艦、駆逐艦などが停泊していて海軍軍人で溢れかえっていた。

「どこ見てもネイビーの軍服だらけね。」

沙織はひとり呟いた。色白の肌に栗色の髪を持った彼女にはネイビーの軍服がいささか浮いていた。

夏用に着替えたらすっごい綺麗になるんだけどね・・・と巴は沙織の横顔を見ながら考えていた。

巴の考えは正しかった。巴は士官学校に入学して間もない頃の阅兵式の時に彼女にはじめて会った。白を基調とした軍帽をかぶって白い軍服に身を包んだ沙織は文字通り人形のようなであった。

それから二人は友達付き合いをはじめ、巴と同じ学級だった悠里とも知り合った。あの頃はまだ日本軍が優勢だった為、士官学校の生徒たちはどこかのんびりとしていた。

皆で授業をボイコットして教官に「お説教」を喰らったり、

演習用艦に演習時の成果を書いたり、

強練合宿の時に夜更かしをしたり。

巴たちの学年の教官は比較的優しい（というか甘い）方だったから多少の悪さは見逃してもらえた。

しかし戦況が悪化し、その教官も戦場に駆りだされ、巴たちは遠く感じていた「戦争」を身近に感じざるをえなかった。

そして、

『沢村大将、南太平洋海戦にて戦死。』

この戦死通告で周りの雰囲気が一変した。教官の死を無駄にするわけにはいかない、なんとしてでもこの『戦争』に勝ってやる、そんな空気が漂っていた。

後に法律が改正され士官学校在学中の生徒も前線に駆りだされるようになった。

そんな自分達を一般の大人は「可哀想だ。」や「昔はこんな事は無かった。」と言うが巴たち

にとっては今現在が大切で必死で生きているのであってそれらの言葉は気休めにもならなかった。「戦死した同期の奴の分も生き抜く。」巴の中にはこの言葉が息づいていた。

「巴？」

沙織の声で巴は我に還った。具合悪いの？、とでも聞いているかのように巴の顔を覗き込んでいる。

「どーしたの？さっきからなんか難しい顔してたけど。」

その尋ねに巴は少し笑いながら首を横に振った。

「ちよつと昔のこと考えてただけ。随分変わっちゃったなあつて。」

「そつか。本当に変わっちゃったよね。いくら軍港でもこんなに軍人がいたことなかったし、それに軍艦もこんなに多くなかったし。」

「・・・そう言えば天城隊が結成されてからまだ半年しか経っていないのよね。何だか不思議。もう何年も前からこの部隊で戦ってる気がする。疲れたっていうのかな・・・？なんて言うかこの戦争はもう終わりが無いんじゃないかと変なことがいろいろ頭の中を廻ってばーつとするんだ。」

それでももう人類は負けるんじゃないかって考えちゃったり、と沙織は常盤色の目を伏せる。

巴はその言葉になんの言葉も投げかけられなかった。「もう人類は負けるんじゃないか」その言葉は正しくもあり否でもある。自分自身も一時そんな事を考えていた。巴は自分の持ち得る語彙をフル活用してやっと一つの言葉を搾り出した。

「そんな事無い。」

強い意志をこめて言う巴の姿に沙織は小さな笑みを返す。

「そうね。」

さっきの戦闘から自分の中で何かが変わった。悠里はそう思った。自分の体質などだけが変わったのではなく根本からの変化をそれとなく感じ取っていた。

（そうだった。あたしはあの後死んだんだ。この世に本当に輪廻転生があるかどうかかわらないけど生まれ変わったら必ずキメラに復讐するって決めてたんだっけ）

「確かそんな感じだったねえ。」

悠里はわずかに口元をほころばせた。

（まだ断片的にしか思い出せないけどそのうち・・・ね）

「キメラなんて皆殺しにしてやるわ。」

その言葉には『覚醒』した彼女とキメラに対する憎悪の念がこめられていた。

日本の神門を守護する二氏族のうち滅びた一氏族の『再生』だった。

第八章

悠里は自分の腰にある日本刀「輝夜」を漆黒の鞘から抜いた。鞘から現れた刀身は銀色に光を反射し鉄の重量感を充分に醸しだしていた。悠里はそれの切っ先を空に向けた。その刀は彼女が「前世」の身だった時に持っていた軍刀を鍛えなおしたもので悠里はそれを常備していた。

「決戦の時は近い……。」「

これではつきりケリをつけてやるわ、あたしの為にも戦死した「あいつ」の為にも。

悠里の顔には今まで見た事が無い表情が支配していた。

軍用ヘリから降りた伊集院はあるかすかな空気の変化を感じ取った。

「直泰様。『彼女』が『覚醒』しました。」「

左肩に安置している玉葉が呼び掛ける。

「そうだな。彼女が目覚めたとなれば戦況は変わる。……。決戦の日は近し……。か。」「

「伊集院中将。」「

部下の言葉が伊集院の鼓膜を振るわせた。

「天城は軍港に停泊し、先程の戦闘で小破した機体の修理と共に修理を受けているとのこと。」「

「了解した。今からその港へ向かう。」「

「徒歩ですか？それは。」「

それは危険では？と部下が進言する。それもそのはずだった。伊集院たちの現在地は北部ほどの人ごみでないにしろ一般人から軍人までたくさん人間がいた。その中には高官を狙った暗殺者がいてもおかしくはなかった。

「大丈夫だろう。北部まではそんなに遠くないし、少し歩きたい気

分だ。お前はもう本部に戻っていいぞ。」

そういうと伊集院は北部の軍港へと歩き始めた。その後姿に部下は「了解しました。」と敬礼を送りへりへ乗り込んだ。へりが飛び立ち、伊集院が歩き出して暫くすると人ごみは消え、白い砂浜にでたふとその時、一陣の風が彼の頬を撫でた。

「玉葉。」

「はい。」

「暫く独りで居たい。」

「かしこまりました。」

伊集院の肩から漆黒の鷹が舞い上がった。伊集院はそれを見送ると白い軍服の上着の前を開け、視線を群青色の澄み切った海に向けた。少し海を見つめた後また独り歩き出した。また風が吹いた。

「今日は風が騒ぐ日だな。」

伊集院はゆつくりと砂浜に足跡をつけていた。

「さっきの激戦ぶりには、損傷が少なかったわねえ。」

天城隊就きの軍医である咲耶はこの小隊ではたった一人の整備員だった。よって大々的な整備は軍港に停泊した時のみできた。

白衣を羽織りなおしながら咲耶は言った。

「まあ戦死者が出なかったほうが嬉しいけどね。」

機械は壊れても修理が効くけど、人間は死んじやったら修理できないもの、と笑いと悲しみを織り交ぜて言った。

「あの戦闘は一生の思い出だな。」

咲耶の右横で龍仁は憔悴しきった顔で呟いた。もう眼が死んでいる。「あんたは無茶をし過ぎなのよ。砲術士官でもないあんたらがふたりだけでF級戦艦を動かそうなんて事自体無謀の極み！」

腕を組んで言う（て言うか怒鳴る）咲耶に龍仁はふと疑問をなげかけた。

「寛さんはなんで独りだけで天城を操艦してんだ？」

「ん、確か戦闘時に出撃してる雪風とかから発信されるデータを基にして左手首に埋め込まれてる端末を通じて動かしてるんだったよ。うな気がするけど。膨大な量の情報が入ってくるから精神的にタフじゃないと難しいって寛さんは言ってたわ。」

ふーんと龍仁は納得したのか修理中の月読に視線を移した。

「こいつ、北条の母さんが設計したってホント？」

「うん。けど沙織のお母さんは開発時の事故に巻き込まれて亡くなっただの。」

あたしの整備学の先生だったんだ、と月読に語りかけるように答えた。

龍仁には月読が泣いているように感じた。

第九章

「これで決戦の準備は整ったか……。あとは……。場所だな。」
初老を迎えた海軍大臣が、ふう、と肩をなでおろす。

枢密院のテーブルの向かいには陸軍大臣が右隣などにはそれぞれの
国務大臣が座っている。彼らの中にはキメラとの決戦に反対するも
のは全くいなかった。いや、反対などできるはずも無かった。反対・
反戦を唱えれば『非常な危険な思想を持つ思想犯』として強制収容
所に収容される。収容されることは死刑と同義語だった。収容所で
の生活は口に出していけないほどの酷さだった。民主主義が続いて
いたとはいえその点では太平洋戦争時代の日本と何ら変わりは無か
った。

「桜島辺りはどうでしょう？あそこなら東京以上の物資がある上に
陸海空三軍の鎮守府もある。トータルの軍事力で言えば日本一だ。」

陸軍大臣が持参した地図を広げる。この場で最も強い発言権と裁定
権を持っていたのは軍部の大臣だった。身の保身を図った他の国務
大臣は無言の同意を示し、海空の二大臣も反対の意を示さなかった。
「決定ですな……。では後日この結果を総理に提出します。……
・くれぐれも反対などお考えなさらないように。」

若い陸軍大臣は狼のような視線で周りを見回す。この場では自分が
最も強い権力を持っていると自覚しての行為だった。

「では解散としますか……。」

空軍大臣が席を立つと他の者も続いて立ち枢密院を立ち去った。中
には海軍大臣と陸軍大臣のみが残された。

「言い出したのは君の部下ですからね……。まあ私も協力します
けど。」

向かいあっている海軍大臣にすれ違いざまに言う。陸軍大臣はどこ
か勝ち誇った表情でもう一言付け加えた。

「失敗したら辞任どころじゃありませんねえ。」

クスクスと笑いながら彼は部屋を出た。

「失敗なんぞするわけが無い。」

半ば自分に言い聞かせるようにして海軍大臣は枢密院をでた。

「何あれ？」

悠里の目が空に舞う黒い影を捉えた。6匹ほどのそれは鳥のようで竜のようでもあった。一匹の巨大な竜が多くの小さなものを率いている。だんだんそれが鮮明になってくる。

（こつちにくる・・・！！）

悠里は飛び起きると甲板をひとり走り内部に行った。

「咲耶！」

「どうしたの息切らして？」

「キメラが・・・キメラが来たのよ！」

その一言にその場にいた全員が凍りついた。

「出撃よ！機体の修理状況はどうなってるの！？」

「・・・出撃できないことはないけど。」

悠里は弾かれたように雪風に乗り込んだ。

「龍仁は皆を呼んできて。それまではあたしが何とかする。」

「お、おい待てよ悠里。」

俺も出撃する、と言い終わらないうちに雪風は大海原の広がる天空に舞い上がった。

（大分近い・・・）

雪風は太刀を構えた。ミサイルはすでに発射が可能だった。

（ワイバーンか）

翼竜のような姿をしているキメラは空の覇者の如き姿で空を舞う。
雪風はそれを迎え撃つことができるように全身の神経を研ぎ澄ませ
た。

「月読、出撃します。」

「不知火、いきます。」

二機の出撃を見送ると寛治はもう二機の出撃を促した。

第十章（前書き）

こっちがホントの十章です・・・（苦笑）

第十章

「これで決戦の準備は整ったか……。あとは……。場所だな。」
初老を迎えた海軍大臣が、ふう、と肩をなでおろす。

枢密院のテーブルの向かいには陸軍大臣が右隣などにはそれぞれの
国務大臣が座っている。彼らの中にはキメラとの決戦に反対するも
のは全くいなかった。いや、反対などできるはずも無かった。反対・
反戦を唱えれば『非常な危険な思想を持つ思想犯』として強制収容
所に収容される。収容されることは死刑と同義語だった。収容所で
の生活は口に出していけないほどの酷さだった。民主主義が続いて
いたとはいえその点では太平洋戦争時代の日本と何ら変わりは無か
った。

「桜島辺りはどうでしょう？あそこなら東京以上の物資がある上に
陸海空三軍の鎮守府もある。トータルの軍事力で言えば日本一だ。」
陸軍大臣が持参した地図を広げる。この場で最も強い発言権と裁定
権を持っていたのは軍部の大臣だった。身の保身を図った他の国務
大臣は無言の同意を示し、海空の二大臣も反対の意を示さなかった。
「決定ですね……。では後日この結果を総理に提出します。……
・くれぐれも反対などお考えなさらないように。」

若い陸軍大臣は狼のような視線で周りを見回す。この場では自分が
最も強い権力を持っていると自覚しての行為だった。

「では解散としますか……。」

空軍大臣が席を立つと他の者も続いて立ち枢密院を立ち去った。中
には海軍大臣と陸軍大臣のみが残された。

「言い出したのは君の部下ですからね……。まあ私も協力します
けど。」

向かいあっている海軍大臣にすれ違いざまに言う。陸軍大臣はどこ
か勝ち誇った表情でもう一言付け加えた。

「失敗したら辞任どころじゃありませんねえ。」

クスクスと笑いながら彼は部屋を出た。

「失敗なんぞするわけが無い。」

半ば自分に言い聞かせるようにして海軍大臣は枢密院をでた。

「何あれ？」

悠里の目が空に舞う黒い影を捉えた。6匹ほどのそれは鳥のようで竜のようでもあった。一匹の巨大な竜が多くの小さなものを率いている。だんだんそれが鮮明になってくる。

（こつちにくる・・・！！）

悠里は飛び起きると甲板をひとり走り内部に行った。

「咲耶！」

「どうしたの息切らして？」

「キメラが・・・キメラが来たのよ！」

その一言にその場にいた全員が凍りついた。

「出撃よ！機体の修理状況はどうなってるの！？」

「・・・出撃できないことはないけど。」

悠里は弾かれたように雪風に乗り込んだ。

「龍仁は皆を呼んできて。それまではあたしが何とかする。」

「お、おい待てよ悠里。」

俺も出撃する、と言い終わらないうちに雪風は大海原の広がる天空に舞い上がった。

（大分近い・・・）

雪風は太刀を構えた。ミサイルはすでに発射が可能だった。

（ワイバーンか）

翼竜のような姿をしているキメラは空の覇者の如き姿で空を舞う。雪風はそれを迎え撃つことができるように全身の神経を研ぎ澄ませた。

「月読、出撃します。」

「不知火、いきます。」

二機の出撃を見送ると寛治はもう二機の出撃を促した。

「飛龍、翔龍出撃してくれ。」

『りょーかい』

『出撃する』

二つの機龍が天城から飛び出した。全員の出撃を見送ると寛治は伊集院に向き直る。

「天城の指揮を頼みます。」

そう言われた伊集院はのほほんとした表情で応えた。

「了解」

「敵の正確な数は7機。そのうち2機がワイバーンで残りが元日本製キメラの朱雀だ。ワイバーンは堅い上に遠距離攻撃が滅法強いからそこんとこ注意しとけ。朱雀は飛龍・翔龍が当たってくれ。」

伊集院が言い終わった途端に寛治が敵の増援を知らせる。

「北東の海中より敵が接近。元ドイツ製のローレライと日本製の海龍、イギリス製のセイレーン、数は不明だ。」

通信を切ると寛治は那覇基地へ新たに通信を繋ぐ。

『こちら那覇基地です。』

「天城隊だ。キメラの急襲に遭った。相手は潜水系だ。潜水艦隊と航空隊に増援を要請する。」

『了解しました。』

「操艦は久しぶりだなあ。」

伊集院は戦闘画面を眺めながら言った。

「ま、頑張りますか。」

基地内では人が行き交っていた。

「どうしたんだこの騒ぎは？」

安藤が宮川に尋ねる。

「またキメラの襲撃だそうです。なんでも天城隊が対処しきれないほどの数みたいで、さっき増援が潜水艦隊と航空隊に要請されたとか。」

「お前は行かなくていいのか？」

怪訝な表情で宮川に尋ねた。

「はい。鎮守府長官に聞いてみたんですけど安藤隊長が負傷ということを出撃はなしみたいです。」

「俺の負傷でか・・・。」

頼りにされてねえな、俺ら、と窓の外を眺める。

「神威さんたちは大丈夫ですかねえ？」

「あいつらの事だからどうにかしてくれるだろ。悔しいが今の俺達にはあいつらの無事を祈ってる事しかできねえ。」

（神威たちが対処できねえ数か・・・）

安藤は心の中でため息をついた。

「まだ生きてるの？」

悠里は半ば驚きながら呟いた。相手はどんなに斬っても力振り絞ってこちらに向かってくる。これとまともに戦ったらよほど戦い慣れ

ている者でも無い限り感情が恐怖に支配されその隙に殺られるだろう。正直悠里も少し恐怖を感じていた。

（これでとどめよ・・・！）

雪風は太刀を振り上げるとワイバーンの長い首を斬りおとした。ワイバーンは1〜2秒の間もがいた後半透明の体液を噴き出し、自らの身体をそれで溶かしながら最期を迎えた。

『さすがは元日本製。丈夫な奴だ。』

彰が息切らしながら自嘲的に笑う。それを聞いた龍仁も肩で息をしながら言う。

「だな。全部俺達だけで倒したら勲章もんだ。」

『まあお偉方はケチくせえからくれないだろうけど。あ、なんかラストの奴がオーバーヒート起こしてやがる。さっきのが効いたっぽい。』

「へー。そりゃ良かった。あとは味方の援護攻撃に行くか。」

『だな。』

汗で顔にまとわりつく短い髪をうっとおしく思いながら二つの機龍は海の中に潜り込んだ。

第十一章

「何なんだよこの数は……。」

通信越しに龍仁の引きつった声が聞こえた。確かに今までに見たこととの無い多さだった。見たところ元日本製の海龍が大半を占めている。それに続いてローレイ、セイレーンと続く。

「ホントだ……。今までみたことないぞ、この多さは。」

彰を自分の声が引きつっているのに気が付いた。少なからず恐怖を感じている。隣の龍仁は翔龍を発進させる。彰をそれに続いた。

戦闘が遠くに移り天城はこの戦闘での役目を終えた。

「とりあえず空中戦は終わりか……。」

ふう、と寛治が一息ついた。しかし眼はまだ鷹のように鋭く、自分を完全に休ませてはいなかった。

「天城は潜水艦じゃないから海中戦はできないね。」

伊集院がヘッドセットを被ったまま言った。

「はい。こういう時の俺が情けなくてしょうがない。」

「何でそんな風に感じるんだい？」

「ただ黙ってみてる事しかできないからですよ……。海の中ではなにが起こっているかでその場で自分が何をすべきか解っている、操艦士官だから艦を離れられない。その上潜水艦ではないから中にも行けずただ敵から自分を守ってあいつらの無事を祈るだけ……。不甲斐ないんですよ……。自分自身が。」

「辞めようとは思わなかったのかい？」

「そりゃ思いましたよ。だけど、もし俺が天城隊を辞めたら伊集院さんはどうなりますか？」

「とても困るよ。隊の皆も君に懐いてるし。それにあの様子じゃあ新しい軍人　　とくに本土軍の　　にはものすごい反発をす

るだろうね。みんな反抗期だし本土軍の人を嫌っているしね。うち
らからたくさん物を奪ったって（笑）。」

伊集院は被っていたヘッドセットを取り外しそのまま言葉を続けた。
「彼らには確固たる存在の証明が無いんだ。みんな何かしら立ち直
れないような辛い経験をしてる。それもみんな軍隊絡みだ。例えば
君たち兄妹のようにね。神威くんだったらどうする？もし自分の存
在の証明がなくなったら、もし自分が必要とされていないと感じた
ら。」

「それを探す、このご時世だったら軍隊に入るのも手だな。今は人
手が不足気味だから喜んで向かえられる。・・・俺もそうだった。」

「そう。だからあの子達は軍隊に入ったんだよ。士官学校に通って
軍人になれば今ではどこの戦地にいつても人手が来たと喜ばれる。

たとえ自分がそこで死ぬとしても。そして正にそうなるうとした時
に天城隊に召集された。そこには自分と似たような奴がたくさんい
る。入隊したときからもうわかっていたんだろね。そして
あの子達は今のようになっていったんだ。だからあんなに頑張っ
ているんだと思う。自分が必要とされているならそれに応えるって言
う事がこの異例の善戦さの原動力なんだ。そして戦闘から生きて還
れば自分を否定せずに迎えてくれる場所と人がある

それが天城と君なんだ。このどちらが欠けてもいけないだろうね。
特に君が戦死したとなると君の妹さんが半狂乱どころか発狂するよ。
あの子は君に可愛がられているから。」

「そうですか？」

「見るだけでわかるし僕にも時々楽しそうに君のことを話すんだ。
両親がいないから彼女をそうさせるんだろうね。確か神威くんが軍
隊に入ったのは両親を亡くしたからだよね？」

「そうですよ。悠里が9歳のころにキメラに殺されたんです。衣食
住を整えてくれるのがいなくなっただから学生手当てのある士官学校
に入学したんです。そうすれば裕福とまではいかなくとも生活がで
きると思った、そして言ったように自分が必要とされている、キメ

ラにも復讐ができたと思った。それだけです。後、一家に軍人のいる家族は徴兵にとられない制度があつたじゃないですか。いまでは女子も戦争にとられる時代だから悠里だけは戦場に行かせたくなかつたんです。だけど。」

「彼女も復讐を望んで軍隊に。」

寛治は黙つてうなずいた。伊集院はそんな寛治をちらつと見ながらまた言葉を紡いだ。

「初めて会つたのは士官学校に入学したての頃だつたよね？」

「はい。確か悠里が伊集院さんと会つたのもそれが始めてです。」

「あの時の彼女は本当に君に懐いていたね。独りじゃ寂しくて士官学校まで君を迎えに来た事もあつたつけねえ。」

「ホントあれはびっくりしましたよ。校門のところに小さい子がいると思うとそれが悠里なんですから。駆け寄ると今にも泣き出しそうな顔をして俺を睨んで……。すぐ後に大泣きを始めて、それを見てた同期たちから一週間はからかいの種にされましたよ。」

二人は隊員の無事を祈りながら昔話に華を咲かせた。すると通信が入る。

『天城隊実戦部隊全機帰艦します。』

彰の声のあとにいろいろ通信の聲が交じり合う。

『あつ氷室！貴様抜け駆けしたな！』

龍仁の声だつた。

『わーずるい！あたしが言おうと思つてたのに！』

巴の声だつた。

『次こそは私が言つてやる……。！』

沙織の声だつた。

『二連覇失敗ね。次こそあたしの番よ……。見てらっしゃい。』

悠里の声だつた。

「ちよつとお前ら一人ずつ言えよ！」

回線がぶつ壊れる、と寛治が笑い混じりの声で言つた。こんな他愛もないことにこだわるのも彼らならではのことだと寛治は感じた。

『まー全員生還ってことですよ。寛さんと伊集院さんは大丈夫ですか？』

彰が操艦画面の映像で尋ねた。他の隊員も同じような事を言っているが声が交じり合って詳しくはわからなかった。

「この通り全然大丈夫だ。さっさと還ってこいよ！」

寛治が通信を切ると、伊集院に言った。

「伊集院さん。あいつらを否定せずに迎える場所にもう一つありますよ。」

「？」

「伊集院さん自身ですよ。」

第十二章

「うへえ、気持ち悪っ！」

巴が今にも吐きそうな調子の声で言う。群青色の海にはキメラの欠片や死者の血が混ざりどす黒い紫色に染まっていた。しかし聞いている方の沙織はそんな事などどうでもいいと言った様子で

『そうね……。あ、繋がった。』

「え？何が？」

『さつきから悠里の回線が繋がらないから別の方法で試してたの。』

こっちに移動してきてから何の音沙汰がないから少し心配でさ。敵もほとんど居なくなっただから、繋がるかなって。』

沙織は言い終わると悠里からの応答を待った。

しかし数分待ってもテレビの砂嵐のような音が聞こえるだけで悠里の応答は無かった。

「……。聞こえた？」

沙織の返事は無かった。返事をしなかったのでは無く、できなかったのだらう。巴には沙織が月読の中で絶句している光景が脳裏に浮かんだ。天城隊の中では戦闘後に通信が繋がらないと死はイコールで結ばれていたからだ。

その時だった。

遠くの澄んだ海底で何かが煌めいた。遠目に捕らえられた戦闘画面の画像を見た限りではそれは雪風の太刀に見えた。その太刀に対しているのはキメラの『黒龍』
巡洋艦レベルの『装甲』

の厚さを持っているキメラだった。

『あれって黒龍じゃない？』

「そんな……。あいつにサシで戦おうなんて。」

そんな無茶な、と言うや否や巴と沙織は各々の機体を海中へ滑り込ませた。

雪風の左腕が太刀と共に吹き飛ばされた。残る武装は右腕とそれに握られた太刀のみだった。弾薬は先程の戦闘で使い果たしてしまい、悠里は太刀のみで、その黒龍と戦うことを余儀なくされた。

残された二本の太刀のうち一本が消えたとなると大きな痛手だった。

（生きて帰れるかなあ・・・）

悠里はそんなことを考えながら半ば自嘲の笑みを浮かべた。

（生まれ変わっても『あいつ』の敵討ちができないのか・・・）

そして悠里が無謀な反撃に出ようとした時、彼女の視界に変化が起こった。

（何なのこれ？）

悠里はすぐさま自分の眼を疑った。それもそのはずだった。急に視界がぼやけ、だが物がこの上無く鮮明に見える奇妙なぼやけ方だった。

その時、悠里は片腕だけで太刀を腰ために構えて黒龍に向かった。

第十三章

悠里は怒りに支配されきつていた。腰だめに構えた太刀を全力込めて袈裟切りに振るうが『装甲』の厚い黒龍にはただのかすり傷にしかならなかった。

そもそも万全でない装備で

複数ならまだしも

、一対一で戦おうというのが間違いだっただ。それも修理が終わっていない機体で。今の雪風は虫の息と言ってもいいほどに損傷が激しく、中の悠里も然りだった。

黒龍はその虫の息の雪風にとどめを刺そうと艦砲を己の身体から出現させる。

（やられる……！！）

逃げなきゃ……、と思いながら雪風を動かそうと念じるが当の雪風は恐怖に硬直した人間のように動かなかった。司令塔部が損傷していたのだ。

黒龍はすでに充填を進めている。その姿はどうやっていたぶろうか
思案中の官吏のようだった。

（早く動いて……！）

しかし雪風は少しも動かない。

目の前で充填されていく艦砲はすでに照準を雪風に合わせている。
悠里は緊迫に支配されどこかが故障しているのではなどと考えもしなかった。

『逃げろ』

この単語が全てだった。

黒龍の充填が終わった。

それに反応したかのように雪風が動き出した。残っていた司令塔部がやっとのことで反応したらしい。

艦砲が雪風の息の根を止めるべく艦砲を一斉発射させた。

悠里は何も考えずに雪風の司令部分に指示をする。『海上へ上がれ』

と。

雪風は砲弾が直撃するぎりぎりに海上へ上がった。
砲弾は海中の空を貫いた。

「いない……。」

月読のセンサーに雪風は掛からなかった。そんな時通信が入った。

『さっきの揺れ、大きくなかった？この海にしてはさ。』

巴の声に沙織は背筋に冷たい何かが走った。

「まさか……。」

その先は言わない。言えない。それが現実だったら嫌だから。
自分の大切な友人を失いたくなかった。失うのは母親でたくさんだった。

「巴……。」

沙織にしては低い声だった。その声を変だと思ったのか巴は訝しげな声色え尋ねた。

『何？』

「……。悠里は絶対生きてるよね？」

『うん！』

自信ありげな返事だった。巴は続けた。

『どっかで生きてるんじゃない？悠里って悪運強いもん。』

だから探してみよ？、と。

月読と不知火は雪風を探すべくセンサーという感覚器官を研ぎ澄ました。

第十四章

「遅いな・・・。」

寛治は半ば苛立ちと心配の念が籠った声で言った。「帰艦します。」の連絡が入ってあいつらのうるさいまでの声を聞き通信を切ってから一時間が経とうとしていた。

「キメラの撤退に巻き込まれたってこともあり得るよ。」

伊集院が膝に肘をつけたまま言った。その蒼い眼はどこか遠くを見ているようだった。

「ところで神威くん。」

「・・・なんですか？」

「どうしてキメラとの戦争は大変だといわれるか知ってる？」

寛治はかぶりを横に振った。自分の部下たちがどうなっているかに精神を支配されそんなことに声を出して応える暇がなかった。

「あいつらとの戦争で最も危険なのは相手の撤退時なんだ。動物的な本能で我先にと逃げようと『暴徒化』するんだ。周りの事なんかお構いなしにね。・・・裏を返せばその時が狙い目なんだけれど成果の程は高が知れている。それどころか生きて還ってくる事さえ難しい。キメラだってバカじゃないから自分が逃げるのを阻む奴はほうっておかないよ。」

対キメラ戦争での死者のうち三分の二が撤退戦時にキメラの群れに飛び込んで殺そうとした奴らなんだ。君の妹さんたちはそれを知らないはずだよ。軍の上層部がそのことを洩らすのを禁じたんだ

死者の殆どがキメラの撤退戦時の戦死なんて示しがつかないからね。だからキメラが周りに無関心になる撤退時を狙っているのかもしれない。

「・・・覚悟しておいたほうがいいね。」

『こちら戦艦初瀬。天城、聞こえるか？』

ひとつの通信に二人の静寂が破られた。通信の主は女性の声だった。
「こちら天城隊の伊集院です。」

『伊集院か、私は初瀬艦長の斎藤です。先程6機の人型兵器と翼龍兵器が負傷しているのを発見し収容したのですが意識がないのか壊れているのかパイロットとの連絡が取れなくて……。雪風という名前に覚えはありませんか……。』

「雪風だつて！？他には何を収容してるんだ！？」

伊集院の驚きように斎藤は困惑しながら応えた。

『確か、月読に不知火に……。』

「神威くん！雪風たちは収容されているそうだよ！！」

「本当ですか！！？」

寛治は喜色満面といった感じでその整った顔の眼を大きく開いた。
そしてすぐさま通信に割り込み、

「様子は！？」

と尋ねた。一方の斎藤ははまだ困惑しつつ、
『損傷はひどいですがパイロットは無事のようにです。意識がないのは機体のほうですので。』

「そうですか！ではすぐにそちらに向かいます！！」

「良かったね。」

につこりと伊集院は寛治に言った。寛治は少年のような笑顔だった。
しかし彼はひとりで自分の歡喜の世界にトリップしており、自分の上司の言葉は聞いていなかった。

「じゃあ初瀬に行くのでしょうか。」

伊集院は天城にそう命じると甲板へ出て行った。

（神威くんは僕の小さいころに似てるなあ・・・）

手放しに喜ぶ寛治の姿を見て伊集院はそう思った。

第十五章

悠里はひどい頭痛を感じていた。頭が万力で締め付けられるような鈍器で殴られた後のようなひどい痛みだった。

（痛いけどまあ良いか。生きてるし。）

鉄の塊のように重く感じる頭を上げると、戦闘画面は消えており、向こう側が少し透けて見えた。なにやら話している。見た所この艦は天城ではないらしいことが悠里にはわかった。

「使えるかな・・・。」

できればそうであって欲しいと思いつつ拡声器のスイッチをONにする。スイッチを入れると空気の流れる音を拾ったのか砂嵐のような音が聞こえた。

「あのお、ここどこですか？」

悠里の声に反応して一人の女性が言葉を返す。

「戦艦初瀬です。気分はどうですか？」

「何か頭が痛いです・・・。」

「自力で出て来れますか？」

「あ、はい。今出ます。」

雪風にコックピットの扉を開けるよう指示する。除々に鮮明な画像が悠里の網膜に映し出された。そこには艦長らしき女性と下士官の少女が立っていた。

「お疲れ様。天城隊の神威さんですね？私は初瀬艦長の斎藤玲子です。」

綿毛で包み込むような優しい声だった。容貌は色白に黒目黒髪、どこことなく微笑んで見える。

「どうも・・・救助していただき、ありがとうございます・・・。」

何か言葉が間違ってるぞ、と思いながらもそれを修正するほどの気力もないのか悠里は頭に思い浮かんだ上司に対する感謝の言葉をそのまま使った。相手の艦長はにっこりと微笑むと、

「疲れてるでしょ？医務室で横になつてきたら？もうすぐ天城と合流するわ。」

水無瀬さん、案内してあげて、と悠里の案内を側にいた下士官に任せた。

「どうも・・・ありがとうございます。」

悠里はゆっくりと身体を持ち上げ雪風から降りた。それを受けた少女が黙って、しかし子供のような笑顔で先を歩き出す。悠里もそれに続く。

「あとの四人は無事かしら。」

斎藤は機体に向き直ると心配そうにため息をついた。

悠里の先を医務室へと歩く少女はまだ11歳程度に見えた。

（なんでこんな小さい子が軍に・・・？）

悠里がそう思っている、突然少女が振り向き、口を開いた。それも人形のように無表情で。

「捨て子だったからです。」

悠里は驚きの色を隠せなかった。どうして解ったの？人の心が読めるの？

彼女がそう考えていると、少女はそのまま続けた。

「私・・・人の心が読めるんです。それを気持ち悪がられて親に捨てられたんです。そこを斎藤さんに拾われて、いまでは軍人の端くれの端くれですよ。」

最後のほうは少し笑っていた。

「伊集院さん、初瀬まであとどれくらいですか？」

弾んだ声で寛治が尋ねた。その顔はまるで子供のようにだった。

「あと少しだから・・・。」

半ば呆れながら伊集院は答えた。もう何回それを聞かれただろう、内心彼はそう思っていた。

「でも本当に良かったな、全員生きていたのは奇跡だよ。」

「全くですよ。腕が良かったのか悪運が強いか解りませんが、あーでも、死んでたらどうしようかと思いましたよ。」

自分が育ててきた四歳ほどしか離れていない大きな子供たちだけあって思い入れも一入らしく、寛治は本当の親のように言った。

伊集院は遠くを見ているような眼になった。

両親は自分のことをこんな風に思っていたのだろうか。

それ以前に自分は両親にとってそんな存在だったのだろうか。

自分は生まれてきてよかったのだろうか。

自分は感情をもった『人間』として存在しているのか。

わからない

伊集院は自分の白い手の甲を頬に当てた。冷たい中にも微かな生きている証であるぬくもりが伝わってきた。
伊集院の頬を水晶の涙が伝った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0361a/>

雪・月・火

2010年11月14日14時41分発行